

[報告]

血液センターまつりにおける集客効果と今後の課題

栃木県赤十字血液センター

長谷川房江, 山崎みどり, 島田麻子, 金井大作, 関百合子, 田代茂生, 野澤晃一

The impact of ‘Blood center festival’ in acquiring and retaining blood donors

Tochigi Red Cross Blood Center

Fusae Hasegawa, Midori Yamazaki, Asako Shimada, Daisaku Kanai,
Yuriko Seki, Shigeo Tashiro and Kouichi Nozawa

抄録

当センターでは、平成21年2月にリニューアルされたセンターをPRするために「血液センターまつり」を行った。栃木センターとしては初の試みであり、全課挙げてのイベントを実施した結果、献血者数が大幅に増加した。まつりを実施するにあたり、早い時期からのポスター掲示・近隣施設へのチラシ配布・採血現場での声かけ等まつりに関するPRに力を入れた。それにより、まつりのPRだけでなく、同時に血液センターの存在を大きくアピールでき、献血者増加に繋がったと考えられる。

「血液センターまつり」という大きなイベントを成し遂げたということに喜びを感じ、その後も順調に献血者数が増加したこと、職員の士気も高まり、センター全体の活性化に繋がった。

はじめに

栃木センターは、中心市街地より10km程離れた場所に位置し、ベッド数は11床、母体採血スタッフは平日4～5名、土日は6名で稼動している。幹線道路からは少し入るため、「目立たない」「交通の便が悪い」などの立地条件もあり平成20年度までの固定施設での献血者数は年間10,899名、1日あたり平均29.9名と伸び悩み、とくに成分献血においては平成19年度の計画本数9,939本に対し達成率81.4%と厳しい状態が続いていた（図1）。そこで、その状態を改善し献血者数を増やすため、平成20年4月に「固定施設を充実させるためのプロジェクトチーム」を立ち上げた。そのプロジェクトの一環として、平成21年2月に母体

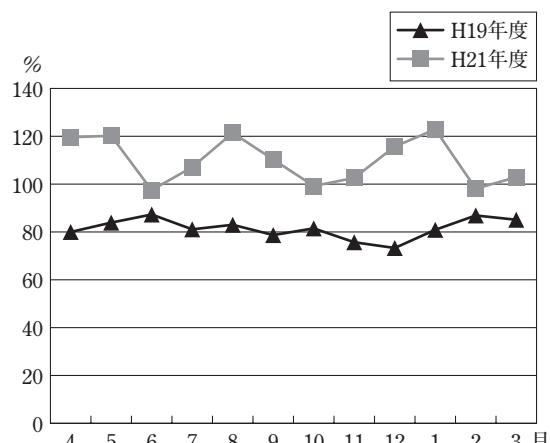


図1 成分献血計画本数の達成率

をリニューアルし、そのPRのため「血液センターまつり」を実施した。

ここでは、「血液センターまつり」の内容を紹介すると共に、まつり開催の効果について評価・検討を行ったので報告する。

まつりの実施内容

1. 実施日

第1回…平成21年2月1日(日)

第2回…平成21年8月8日(日)

2. PR

まつりのPRは、まつり実施が決定した半年前から固定施設での声掛けを始め、3カ月前からは近隣店舗・住宅・保育施設のほかに官公庁・日赤支部などに総数3,000枚のチラシと新聞折込3,000枚を配布した。このほか、献血者へのハガキ郵送や地元のメディアによる宣伝、メール・ポスター掲示などあらゆる方法でまつり実施の周知に努めた。

3. 献血者の受入方法

餅つき、豚汁、焼きそば、綿菓子などのフードコーナーのほかゲームやバルーンアート、切り絵コーナーを設け、幅広い年齢層に楽しんでもらえるようにした(図2)。

フードコーナー、ゲームコーナーはすべて無料で提供し、休憩所はゆっくり過ごせるように、100席を準備した。

職員はまつり班と採血班に分かれ、それぞれが念入りな打ち合わせのもと、まつりに臨んだ。まつり班は他課の職員とチームを組み、フードコーナー・ゲームコーナーそれぞれ担当に分かれ、企業・学生ボランティアを含めたスタッフ全員で、来所者をもてなした。採血班は多数の献血者を受入れるために、採血スタッフを通常日曜日の6名から8名に増員し、そのほかフリーのスタッフを2名置いた。第1回のまつりでは、移動採血バス出さずに、母体のみで全血と成分の献血者を受入れたことにより、多数の献血者で混雑してしまった。そのために2回目以降は母体では成分献血のみ、会場内に設置したバスでは全血献血のみと受

付の段階から分けて、混雑防止に努めた。このほかにも、誘導係の配置・献血場所の表示をわかりやすく明記することでスムーズに誘導することができた。これにより、混雑が軽減され献血の待ち時間短縮にも繋がった。

分 析

- ・第1回まつり前(平成20年2月1日～平成21年1月31日)とまつり後(平成21年2月1日～平成22年1月31日)の献血者数の比較
- ・まつり当日献血者の履歴調査により、まつり前後の献血来所状況を比較
- ・まつり来所者、職員へのアンケートの集計および分析



バルーンアート



餅つき

図2 まつりの様子

結 果

これらの分析結果より3つの効果が得られた。

1つめは、献血者の大幅な増加である。まつり前後1年間の献血者数を比較すると15.9%の増加で、とくに成分献血者の増加が著しく、22.4%もの増加がみられた。成分献血者の占める割合も8割を超え、現在も増加の一途を辿っている(図3)。まつり当日献血者の履歴調査でも、第1回と2回を併せて236人中42人が、まつり後に献血来所頻度が増加していた。人数の把握はできないが、当日は献血できなかつた方でも、後日ご協力いただいた方がいることも採血現場の声からも聞かれている。このことからも、まつりが献血のきっかけとなったことがわかる。献血未経験の方やしばらく献血から遠のいていた方もまつりをきっかけに協力していただけるようになった。それにより、平日閑散としていたセンターにも活気が見られるようになった。

2つめは、センターの存在を大きくアピールできたことである。献血者の声から、まつり前のセンターのイメージは「暗い」「怖い」であつたり「近寄りがたい、入りにくい」など、中には、センターで献血ができることすら知らない方もいた。ま

ついでリニューアルしたセンターを見ていただきたり、職員と一緒にまつりを楽しんでいただいたりすることで、「明るい」「親しみやすい」など、イメージアップとなった。早い時期からの広報活動の効果もあり、立地条件の悪い当センターを多くの方に周知することができた(図4)。

3つめは、まつりがコミュニケーションの場となったことである。普段とはまた違った雰囲気の中で献血者やその家族、地域の人々と楽しむことができた。職員間でも自然と会話が弾み、忙しいながらも楽しい時間を共有することができたことにより、他課との交流を深める機会ともなった。

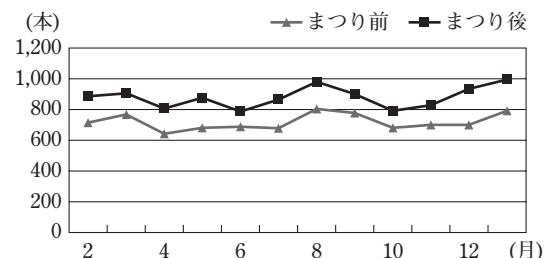


図3 成分献血者数の推移

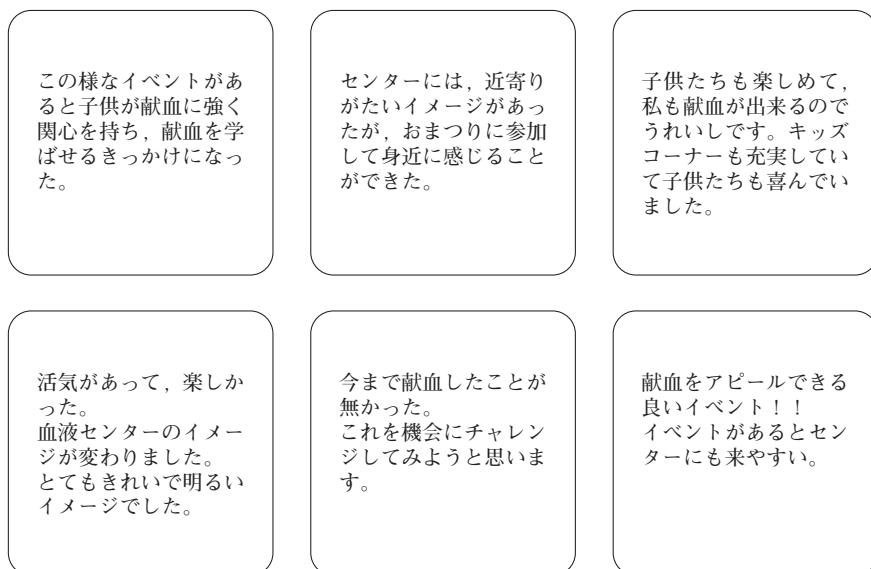


図4 献血者の声

これらの効果は、職員のモチベーションをアップさせ、仕事に対する意欲も向上させた。職員アンケートでも「仕事にやりがいを感じる」という回答が9割と、まつり効果はセンター全体の活性化に繋がった（表1）。

考 察

今回のまつり開催は、「献血」に対するイメージアップが図れ、献血者増加に繋がったと考えられる。また、職員の意識高揚によりセンター全体が活性化され、有意義なものとなった。

今後、まつりを継続する中で内容の充実が課題であり、そのためには献血に関する情報発信はもちろん、「救急法・AED講習の開催」「防災講座・災害グッズの展示や炊き出しの実施」「募金活動」

表1 職員アンケート集計結果

	はい	いいえ	不明
まつりに参加してよかった	84%	16%	—
まつりを実施してよかった	95%	4%	1%
仕事にやりがいを感じる	89%	8%	3%

など、日赤の活動をアピールできるような企画を考える必要がある。

まつりに参加しながら、生活に役立つ知識を身につけていただき、「人のため」「自分のため」になるようなまつりにすることで、地域に貢献していきたい。

実施しながら改善を繰り返し、来所者と共に楽しめるイベントとする中で、地域密着型のセンターとして「もっとクロス！」していきたい。